河合塾エンリッチ講座 2015

ルワンダと日本
義肢という架け橋

◉講演：**ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル＆ルダシングワ真美**
（NGOムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト代表）

◉司会：**鶴岡　聡**
（世界史科講師）

ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル
（Gatera Rudasingwa Emmanuel）

1954年ルワンダ共和国ギソジ生まれ。
幼い頃、治療ミスのため、右足が麻痺してしまい、障碍者の施設で育つ。
1980年代ルワンダの紛争を避けるためにケニアに逃れ、アフリカ民芸品を卸しながら過ごし、パートナーの吉田真美と出会う。
1994年ルワンダ大虐殺終結後、ルワンダに戻り、1996年NGOムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトを設立。現ルワンダ・グルンジ事務所代表。

ルダシングワ真美

1963年神奈川県茅ヶ崎市生まれ。
英語の専門学校卒業後、約6年間OLをする。
1989年ケニア・ナイロビにあるスワヒリ語学校に半年間留学し、その後東アフリカを旅行中に、パートナーのガテラと出会い、ルワンダ内戦やルワンダの障碍者の状況を聞き、義肢装具士になることを決意。1992年より横浜の義肢製作所に弟子入りし、修行をする。
1996年夫のガテラと共にNGOムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトを設立。

1994年4月、予期されていた以上の惨劇が、ルワンダで起こった。それまでくすぶっていた民族間対立が大爆発し、100万人以上の人が殺された。当時人口1000万足らずの小国でである。

アフリカという地理的な遠さに加えて、この残虐さゆえに、自分たちとは全くの別世界の話と思えてしまうかもしれない。しかし、この民族間対立は、じつはヨーロッパ諸国が植民地政策の一環として、ルワンダ国民を二つの民族に分割したのがはじまりだったのだ。植民地政策の残した傷跡の大きさを考えることはわれわれにとって無縁とは言い切れないだろう。

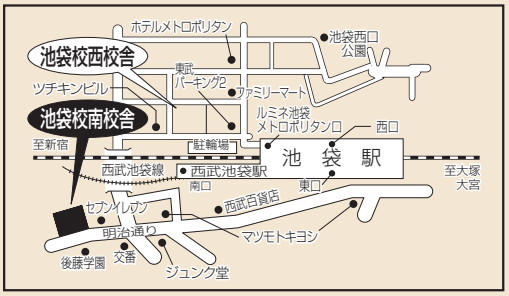
その遠い場所で、虐殺を生きのびた人々に援助の手を差し伸べてきたルワンダ人と、日本人がいる。なたで手足を切り落とされた人々のために、義肢作りを一から学び、夫婦で現地で必要とする人に義肢を無償で提供してきた。

大虐殺からの復興めざましいルワンダの陰で一人の日本女性が活動してきたことを知ることは、われわれが無力感の中に安易にうずくまることのないよう背中を押してくれるのではないだろうか。

6月29日(月)　17:30～19:00
池袋校南校舎　6C教室

入場無料
申込不要

〒171-0022　東京都豊島区南池袋 1-9-24
0120-198-660
●JR・西武池袋線・東武東上線・東京メトロ丸ノ内線・有楽町線・副都心線池袋駅東口より徒歩10分



※どなたでも自由に参加できます。